屁

新美南吉

青空文庫

石太郎が屁の名人であるのは、浄光院の是信さんに教えてもらうからだど、みんながいつていた。春吉君は、そうかもしれないと思つた。石太郎の家は、浄光院のすぐ西にあつたからである。

なにしろ是信さんは、おしもおされもせぬ屁こきである。いろいろな話が、是信さんの屁について、おとなたちや子どもたちのあいだに伝えられている。是信さんは、屁で引導をわたすという。まさかそんなことはあるまいが、すいこ屁（音なしの屁）ぐらひは、お経の最中にするかもしれない。

また、ある家の法会で鐘をたたくかわりに、屁をひつてお経をあげたという。これも、おとながおもしろ半分につくつたうそらしい。だが、これだけはたしかだ。是信さんは、正午の梵鐘をつきながら、鐘の音の数だけ、屁をぶつばなすことができるということである。春吉君は、じぶんでその場面を見たからだ。

石太郎が是信さんの屁弟子であるといううわさは、春吉君に、浄光院の書院まどの下の日だまりに、なかよく日なたぼっこしている是信さんと、石太郎のすがたを想像させた。茶色のはん点がいつぱいある、赤みがかつたつやのよい頭を日に光らせ、洗いふるしたね

ずみ色の着物の背せをまるくしている、年よりの是信さん。顔のわりあい耳がばかに大きい、まるでふたつのうちわを頭の両側につけて見えるように見える、きたない着物の、手足があかじみた石太郎。

きつと石太郎は、学校がひけると、毎日信さんとそういう情景をくり返しながら、屁への修しゆぎやう業をつんでいるのだろう。まったくかれは屁の名人だ。

石太郎は、いつでも思いのままに、どんな種類の屁でもはなてるらしい。みんなが、大きいのをひとつたのむと、ちよつと胸算用むなざんようするようなまじめな顔つきをしていて、ほがらかに大きい屁をひる。小さいのをたのめば、小さいのを連発する。にわとりがときをつくるような音を出すこともできる。こんなのは、さすがに石太郎にもむずかしいとみえ、しんちようなおもちで、からだ全体をうかせたりしずめたり——つまり、調子をとりにから出すのである。そいつがうまくできると、みんなで拍手かっさいしてやる。

しかし石太郎は、そんなときでも、屁をくらったような顔をしている。その他、とうふ屋、くまんばち、かにのあわ、こごと、汽車など、石太郎の屁にみんながつけた名まえは、十の指にあまるくらいだ。

石太郎が屁の名人であるゆえに、みんなはかれをけいべつしていた。下級生でさえも、

あいつ屁えこき虫と、公然指さしてわらった。それを聞いても、石太郎の同級生たちは、同級生としての義憤ぎふんを感じるようなことはなかった。石太郎のことで義憤を感じるなんか、おかしいことだったのである。

石太郎の家は、小さくてみすばらしい。一步中にはいると、一種異様なにおいが鼻をつき、へどが出そうになる。そして、暗いので家の中はよく見えない。石太郎は、病気でねたつきりのじいさんとふたりだけで、その家に住んでいる。

どこかへかせぎに出ているおとつつあんが、ときどき帰ってくる。おつかあは、早く死んでしまつて、いない。石太郎は、ポンツク（川漁）にばかりいく。とつてきたふなや、どじょうを、じいさんにたべさせる。また、買いにいけば、どじょうやうなぎを売つてくれるということである。

石太郎の着物は、いつ洗つたとも知れず、あかだまつ黒になつてゐる。その着物に、家の中のあの貧乏びんぼうのにおいや、ポンツクのなまぐさいにおいをつけて、学校へやつてくる。そのうえ、注文されなくてもかれは、ときおり放屁ほうひする。

みんなは、石太郎のことを、屁へえこき虫としてとりあつかつてゐる。石太郎のほうでも、そのほうがむしろ気楽なのか、一どもふんがいたしたことはない。生徒ばかりでなく、たい

ていの先生まで、石太郎を虫にしているので、石太郎は、だんだんじぶんでも虫になっていった。かれは、教室で、いちばんうしろに、ひとりでふたり分のつくえをあたえられていたが、授業中にあまり授業に注意しなかった。たいていは、ナイフで鉛筆に細工さいくしていた。またかれは、まじめになるときがなくなってしまった。屁の注文をうける場合のほかは。かれは、いつもぐにやぐにやし、えへらえへらわらっていた。

春吉君は、一ど、石太郎のことで、じつにはずかしいめにあったのである。

それは五年生の冬のことである。三年間受け持じびょうっていた、年よりの石黒先生が、持病じびょうのぜんそくが重くなつて、授業ができなくなり、学校をおやめになった。かわりに町から、わかい、ロイド眼鏡めがねをかけた、かみの長い藤井ふじい先生がこられた。

春吉君の学校は、かたいなかの、百ひやく姓しょうの子どもばかり集まっている小さい学校なので、よそからこられる先生は、みな、都会人のように思えたのだった。藤井先生をひと目見て、春吉君はいきづまるほどすきになってしまった。文化的な感じに魅みせられたのである。石黒先生もよい先生であつたが、先生は生まれが村の人なので、ことばが、生徒や村のおとなたちの使うのとほとんど変わらないし、年をとっていられるので、体操たいそうなど、ちつとも新しいのを教えてくれない。走りあいか、ぼうしとりか、それでなければ、砂場

ですもうをとらせる。いちばんいやなのは、話をしている最中に、せきをしはじめることである。長い長い、苦しげなせき。そして、長いあいだ、さんざ苦勞をしたあげく、のどからやつと口までうち出したたんを、ポケットに入れて持っている新聞紙のたたんだの中へ、ペツペツとはきこみ、その新聞紙を、まただいじそうにポケットにしまうのである。さて、藤井先生が、はじめて春吉君の教室にあらわれた。はじめて生徒を見る先生には、生徒は、みないちように見える。よく、それぞれの生徒の生活になれると、それぞれの生徒の個性がはつきりしてくるが、顔を最初見たばかりでは、わからない。だれがりこうで、だれがしようもないあほうであるかも、わからない。

藤井先生はまず、教卓きょうたくのすぐ前にいる坂市君さかいちにむかって、「きみ、読みなさい」といった。それは読み方の時間だった。「きみ」ということばが、春吉君をまた喜ばせた。なんとという都会ふうのことばだろう。石黒先生はこんなふうにはよばなかった。先生は、生徒の名を知りすぎていたから、「源げんやい読め」とか、「照てるン書け」とかいったのである。坂市君が読んでいきながら、知らない字をのみこむようにしてとばしたり、あいまいにごまかしたりすると、石黒先生はそんなのをほったらかしておかれたのに、わかい藤井先生は、いちいち、え、え、と聞きとがめられた。そんなことまで、春吉君の気にいった。

もうなにからなにまで、この先生のすることはよかった。

藤井先生は、坂市君から順順にうしろへあてられた。四人めには、春吉君がひかえている。春吉君は、この小さい組の級長である。春吉君は、きりつとした声をはりあげて、朗ろう々と読み、未知のわかい先生に、じぶんが秀才であることをみとめてもらおうつもりで、番のめぐってくるのを、いまやおそしと待っていた。

いよいよ春吉君の番だ。春吉君は、がたつとこしかけをうしろへのけ、直立不動のしせいをとり、読とく本ほんを持った手を、思いきり顔から遠くへはなした。そして、大きくいきをすいこみ、いまや第一声をはなとうとしたとたん、つごうのわるいことが起こった。ちやうどそのとき、藤井先生は、机間巡視きかんじゆんしの歩を教室のうしろの方へ運んでいられたが、とつじよ、ひえつというような悲鳴をあげられ、鼻をしかとおさえられた。

みんながどつとわらった。また、屁へえこき虫の石が、例のくせを出したのである。

なんとというときに、また、石太郎は屁をひつたものだろう。春吉君は、すかをくらわされたように拍ひょうし子ぬけして、わらえもしなければおこれもせず、もじもじして立っていた。藤井先生はまゆをしかめ、あわててポケットからとり出したハンケチで、鼻をしかとおさえたまま、こりやひどい、まったくだ、さあまどをあけて、そっちも、こっちもと、

さしずされ、しばらくじつとしてなにかを待っていられたが、やがて、おそろおそろハンケチを鼻からとられ、おこつてもしようがないというように、はっはつと、顔の一部分でみじかくわらわれた。だがすぐきつとなられて、だれですか、今のは、しようじき正直に手をあげなさいと、見まわされた。

石だ、石だ、と、みんながささやいた。藤井先生は、その「石」をさがされた。そして、いちばんうしろの壁かべぎわに発見した。石太郎は、新しい先生だからてれくさいとみえて、つくえの上に立てた表紙のぼろぼろになった読とくほん本のかげに、かみののびた頭をかくすようにしていた。

立っていた春吉君は、そのとき、いい知れぬ羞しゆううち恥じしょうの情にかられた。じぶんの組に、石太郎のような、不潔ふけつな、野卑やひな、非文化的な、下劣げれつなものがあるということ、都会ふうの、近代的な明るい藤井先生が、どうお考えになるかと思うと、まったく、いたたまらなかつた。

藤井先生は、相手を見てすこしことばの調子をおとしながら、いろいろ石太郎にきいたが、要領を得なかつた。なにしろ石は、くらげのように、つくえの上でぐにやつくばかりで、返事というものをしなかつたからである。

そこで近くにゐる古手屋の遠助とのおすけが、とくいになつて説明申しあげた。まるで見世物の口上こうじょう 上こうじょう 上こうじょう 上こうじょう のように、石太郎はよく屁へをひること、どんな屁でも注文どおりできること、それらには、それぞれ名まえがついていること等とうとう 等とうとう 等とうとう 等とうとう 。

春吉君は、古手屋の遠助のあほうが、そんなろくでもないことを、手がら顔して語るのを聞きながら、それらのすべてのことを、あかぬけのした、頭をテカテカになでつけられた藤井先生が、どんなにけいべつされるかと思つて、じつにやりきれなかつたのである。

一年おきにやつてくる、町の小学校との合同運動会でも、春吉君は、石太郎の存在をうらめしく思つた。その日には春吉君の学校は、白いべんとうのつつみを背せなか中にしよつて、半里ばかりの道を、町の大きい小学校へやつていく。大きなりっぱな小学校である。木づくりの古い講堂があり、えび茶のペンキでぬられた優美な鉄さくが、門の両方へのびていつている。運動場のすみには、遊動円えんぼく 木や回旋塔かいせんとう など、春吉君の学校にはないものばかりである。ここの小学校の生徒や先生は、みな、町ふうだ。うすいメリヤスの運動シャツ、白いパンツ、足にぬつたヨジウム。そして、ことばが小鳥のさえずりににて軽快だ。春吉君は、一步門内にはいるときから、もうじぶんたち一団のみすぼらしさに、はずかしくなつてしまう。なんとという生せいさい彩さいのないじぶんたちであろう。友だちの顔が、さるみ

たいに見える。よくまあこんな、べんとう風呂敷ふろしきをじいさんみたいにしよってきたものだ。まったくやりきれないなかふうだ。

こういう意識いしきが、運動会のおわるまで、春吉君の中でつづく。ちよつとでも、じぶんたちのふていさいなことをわらわれたりすると、春吉君はつきとばされたように感じる。町の見物人たちのひとりひとりが、春吉君のことを、まあ、じょうぶそうな色をしてと、つぶやいたとしても、春吉君は恥辱ちじよくに思うのである。町の人がおどろくほどの健康色、つまり、日焼けしたはだの色というものは、町ふうではなく在郷ざいじょうふうだからだ。

ある人びとは、保護色性ほごしよくせいの動物のように、じき新しい環境かんきょうに同化されてしまう。で、藤井先生も、半年ばかりのあいだに、すっかり同化されてしまった。つまり都会気分がぬけて、いなかじみてしまった。洋服やシャツはあかじみ、ぶしようひげはよくのびており、ことばなども、すっかり村のことばになってしまった。「なんだあ」とか、「とろくせえ」とか、「こいつがれ」などと、春吉君がそのことばあるがため、じぶんの故郷こきょうをきらっているような、げびた方言を、平気で使われるのである。春吉君が、藤井先生も村の人になったということをしみじみ感じたのは、麦のかられたじぶんのある日だった。

午後の二時間め、春吉君たちは、校庭のそれぞれの場所にじんどって、水彩の写生をし

ていた。小使室のまど下に腰をおろして、学校のげんかんと、空色にぬられた朝礼台と、そのむこうのけしのさいているたんざく型の花だんと、ずうつと遠景にこちらをむいて立つてる二宮金次郎の、本を読みつつまきをせおって歩いているみかげ石の像とをとりいれて、一心に彩筆さいひつをふるっていた春吉君が、ふと顔をあげて南を見ると、学校の農場と運動場のさかいになつてゐる土手どての下に腹ばつて、藤井先生が、なにか土手のあちら側にむかつてあいずをしていられる。

いちはやく気づいたものがもうふたり、ばらばらとそちらへ走つていくので、春吉君も画板がばんをおいてかけつけると、土手の下に、水を通ずるため設けてある細い土管の中へ、竹ぎれをつつこんでゐる先生が、落ちかかつて鼻の先にとまつてゐる眼鏡めがねごしに春吉君を見て、

「おい、ぼけんと見とるじゃねえ、あつちいまわれ。こん中にいたちがはいつとるだぞ。今こつちからつつくから、むこうで、屁へえこき虫といつしよにかまえとつて、つかめにがすじゃねえぞ」
と、つばをとばしながらおつしやつた。

むこう側へこしてみると、なるほど、屁えこき虫の石太郎が、このときばかりはじつに

しんけんな顔つきで、そのどろみぞの中にひぎこぶしまではいつて、土管の中へ、右手をうでのつけねまでさし入れている。うでをすっかり土管の中につっこんでいるので、しぜん頭が横むけに土手の草におしつけられ、なにか、土手の中のかすかな物音に、耳をすまして聞いているといった風情である。

じき近くにあるあひる小屋にいる二わのあひるが、人のけはいでひもじさを思い出したのか、があがあとやかましく鳴きだした。

春吉君は、どろみぞの中へとびこんでいく気にはなれなかったし、石太郎が土管のあなを受け持っているからには、よけいな手だしはしないほうがいいので、ほかのものといっしよに見ていた。

「ええか、ええかあ、にがすなよおつ」

という藤井先生の声が、地べたをはつてくる。石太郎はだまって、依然、土手の声に聞き入っていたが、やがて、土手についていたもう一方の手が、ぐつと草をつかんだかと思うと、土管の中から、右手を徐々しよじよにぬきはじめた。

首ねっこを力いっばいにぎりしめられていた大きなたちは、窒息ちっそくのためもうほとんど死んだようになっていて、土管の外へ出ると、だらりとえりまきを見るようにぶらさが

つたが、すこし石太郎が手をゆるめたのか、なにかかき落とそうとするように、四肢をもがいた。するとそのとき、どろみぞからあがっていた石太郎は、ちくしょうと口ぼしって、目にもとまらぬ敏捷^{びんしょう}さで、いたちを地べたへたたきつけた。

ぼたつと重い音がして、古いたちは、のびてしまった。春吉君は、いつも水藻^{みずも}のような石太郎が、こんなにはつきり、ちくしょうつという日本語を使ったこともふしぎだったし、こんなにするばしい動作^{どうさ}ができるということも不可解な気がした。

それはともかく、そのとき春吉君は、藤井先生が、このかたいなかの、学問のできない、下劣^{げれつ}で野卑^{やひ}な生徒たちに、しごく適した先生になられたことを感じたのである。といつて、べつだん失望したわけでもない。けつきよく、親しみをおぼえて、それがよかったのだ。

藤井先生は、石太郎ととらえたあのいたちを、へびつかみの甚太郎^{じんたろう}に、二円三十銭で売った。その金で、小使いのおじさんと一ぱいやったという話を、二、三日して春吉君は、みんなからだおもしろく聞いた。先生はまだ独身で、小使室のとなりの宿直室で寝起^{ねお}きしていられたのである。

教室でも先生が変化したことは、同じことだった。坂市君や、源五兵衛君^{げんごべえ}や、照次郎^{てるじろう}君などが、知らない文字をうのみにして読^{とく}本^{ほん}を読んでいっても、最初のころのように、

え、え、と、優美にとがめるようなことはされなくなった。年よりの、ぜんそくもちの石黒先生と同じように、知らんふりしてズボンのポケットに両手をつっこんで、つくえのあいだを散歩していられるのであった。

こういうぐあいに、すべての点で藤井先生はいなかの気ふうにならされ、のみならず、いなかふうをマスターするようにさえなったのだが、石太郎の、授業中にときどき音もなくはなつ屁へにだけは、あくまで妥協できなかつたのである。

情景はおおよそ、次第しだいがきまつていた。まず最初にそれを発見するのは、石太郎の前にいる学科のきらいな、さわぐことのすきな、顔ががまににている古手屋の遠助とおすけである。かれは、先生のまじめなお話などいささかもわからないので、どんなに、クラス全体が生けんめいに先生の話に傾聴けいちょうしているときでも「あつ、くさつ、あつ、あつ」といいだす。

すると、教室のその一角かくから、「あつ、くさつ、あつ、くさつ」という声が、波紋はもんのようにはひろがり、ざわめきだす。すると藤井先生は、あわててハンケチを胸のポケットから出す。（あまり倉卒そうそつにとり出すので、頭髪とうはつをすく小さいくしが、まつわつてとび出したこともある）ハンケチで鼻をしっかりとおさえる。鼻声で、まどをあける、まどを、そ

つちも、こつちもと、下知なさる。

それから南のまどぎわへ歩いていって、外の空気をすうために、ややハンケチをおはなしになる。藤井先生のいつもきまった動作がおもしろいので、生徒らは、男子も女子も、ますます、くさいとさわぐ。すると、古手屋の遠助が、きようは大根屁だとか、きようはいも屁だとか、きようは、えんどう豆屁だとか、正確にかぎわけて、手がら顔にいうのである。

みんなは、遠助の鑑識眼かんしきがんを信用しているので、かれのいったとおりのことばを、また伝えはじめる。

「あ、大根屁だ。大根くせえ」

というふうに。ようやく喧騒けんそうが大きくなったころ、先生は、

「だれだつ」

と一かつされる。一同はびたつと沈黙する。そして申しあわせたように、教室の後方に頭をめぐらす。みんなの視線の集まるところに、屁えこき虫の石太郎が、てれた顔をつくえに近くさげて、左右にすこしずつゆすつているのである。

その静寂せいじやくの時間がやや長くつづく、石だ、石だ、という声が、こんどはだれいう

となく、石太郎よりもっとも遠い一角より起こってくる。藤井先生は黒板のうらがわにかけてある竹のむちを持って、つかつかと石太郎のところへいき、いいかげんにしとくと、むちのえで、石太郎のこめかみをこづかれる。そのときは先生も、石太郎と協力してとつた古いたちの代で、一ぱいいけたことは、忘れていられるように見えるのである。

こういう情景は、もうなんどくり返されたかもしれない。いつも判でおしたかのごとく同じ順序で。

秋もはじめのころの、学校の前の松の木山のうれに、たくさんのからすがむれて、そのやかましく鳴きたてる声が、勉強のじやまになる、ある晴れた日の午後であった。

春吉君たちは、六時間めの手工しゅこうをしていた。その日の手工は、かわら屋の森一君がバケツ一ぱい持ってきたねんどで、思い思いの細工さいくをするのである。

春吉君は茶のみ茶わんをつくっていた。ほんとうの茶わんのように、土をうすく、しかも正しい円形につくることは、なかなかよいではない。すでになんべんも、できあがった茶わんが意にみたく、ひねりつぶし、またはじめからやりなおしていた。そしてついに、こんどこそはと思われる逸品いっぴんができあがりつつあった。春吉君は、細心の注意をはらって、竹べらをぬらしては、茶わんのはらの凹凸おうとつをならしていった。

すつかり茶わんに心をうばわれ、ほかの、いつきいのことを忘れていたが、ふとわれに返った春吉君は、「しまった」と思った。朝からすこし腹ぐあいかわるく、なにか重いものが下腹いつたいにつまっている感じで、ときどき、ぷつぶつと豆のにえるような音もしていたので、ゆだんすると屁へをするぞと、心をいましめていたのだが、ついに、しごとへに熱中して、今その屁を音もたてずにしてしまったのである。おかげで腹がかるくなつたが、腹のかるくなるほどの屁というものは、はげしい臭気をともなっているはずだと、春吉君は思った。

うまくだれも気づかずにくれればよいがと、春吉君はひそかに願った。ならばの席にいる源五兵衛君は、鼻じるをすすりながら、ぶかつこうに大きな動物——たぶん、かめだろうと思われるが、ともかく四足動物の四本めの足をくつつけようと努力している。うしろの照次郎君も、与之助君も、それぞれの制作に余念がない。

すこし時間がたった。春吉君はたすかつたと思った。と、そのせつな、古手屋の遠助が、あ、くせ、と、第一声をはなつた。すぐに、くせえ、くせえ、という声が、四方に伝わった。春吉君は、はずかしさで顔がほてってきた。

いつもと同じさわぎがはじまつた。屁えこき虫の石太郎が屁をはなつたときと、寸分すんぶん

ちがわぬことが。

春吉君は、どうしていいのかわからない。もう、なりゆきにまかすばかりだ。

やがて古手屋の遠助が、きようは大根菜屁だいこんなつぺだといった。なんとこの鋭敏えいびんな嗅覚きゆうかくだろう。たしかに春吉君は、けさ大根菜のはいったみそしるでたべてきたのである。

やがてさわぎが大きくなりだしたころ、藤井先生が例によって、

「だれだつ」

とどなられた。春吉君は意味もなくねんどをひねりながら、いきをのんて、面おもてをふせた。みんなの視線が、ちようどいつも石太郎の上に蝟集いしじゅうするように、きようは、じぶんこそがれているのだと思いつながら。

いまはどこからか、春吉君だという声が起こってくるにそうもない、と思った。そういうふうにつきり観念かんねんしていたので、石だ、石だ、というあやまった声があがったときには、じぶんの頭上に落ちてくるはずのげんこつが、わきにそれたように、ほつとしたきみような感じになった。

顔をあげてみると、意外にも、みんなの視線は、春吉君に集中されておらず、やはり石太郎の方にむいているのだ。

藤井先生が、黒板のうらにかかっているむちをとって、つかつかと石太郎の前に歩いていかれる。春吉君の心の底から、正義感がむくつと起きてきた。じぶんだといってしまおうか、しかし、だれひとり、じぶんをうたがってはいないのである。ここで白状するのは、なんともはずかしい。先生が石太郎の席に達するまでのみじかい時間を、春吉君の中で正義感と羞恥心しゆうちしんとが、めまぐるしい闘争をした。それが春吉君の動悸どうきを、鼓膜こまくにドキッドキツとひびくほど、はげしくした。そして、しばらく正義感がおさえられた。

反射的に、ねんどを親指と人さし指の腹ですりつぶしながら、春吉君は見ていた。石太郎はいつもと変わらず、てれた顔をつくえに近くゆすっている。いまに、おれじゃないと弁解するかと、春吉君がひそかにおそれながらも期待していたのに、その期待もうらぎられた。石太郎は、むちでこめかみをぐいとおされ、左へぐにやりとよろけたが、依然いぜんてれたような表情で、沈黙しているばかりである。

春吉君はよぎなく、じぶんの罪を白状させられる機会は、ついにこなかった。これでさわぎはすんでしまった。一同は、ふたたび作業にとりかかった。

しかし春吉君だけは、事がまだ終末にいたっていない。気持ちにせおいきれぬほどの負担ができてしまった。春吉君には、こんな経験は、生まれてはじめてといってもよい。春

吉君はいままで、修身の教科書の教えているとおりの、正しいすぐれた人間であると、じぶんのことを思っていた。

今、じぶんが沈黙を守って、石太郎にぬれぎぬをきせておくことは、正しいことではない。じぶんは、どうどうというべきである。いまからでもよい。さあ、いまから。そう口の中でいいながら、どうしても立ちあがる勇気が出ないのであった。

春吉君はくやしきのあまり、なきたいような気持ちになつてきた。それをはぐらかすために、できあがつていただいじな茶わんを、ぐつとにぎりつぶしたのである。

*

まったくこれは、春吉君にとつて、この世における最初の、じぶんで処理せねばならぬ煩悶はんもんであつた。それは家へ帰つてからも、つぎの日学校にふたたびくるまでも、しつこく春吉君のあとをつけてきた。たいていのなやみは、おかあさんにぶちまければ、そして場合によつては少々なけば、解決つくのだが、こんどは、そういうわけにはいかない。

だいいち、どういつておかあさんに説明したらいいのか。雑誌がほしいとか、おとうさんのだいじな鉢はちをわつてしまったとかならば、かんたんにじぶんのなやみを知つてもらえるが、これはそんなやさしいものではない。複雑さが、春吉君の表現をこえている。屁へを

ひつた話などしたら、まっさきにおかあさんはわらいだしてしまふだろう、とても、まじめにとつてくれぬだろう。

春吉君は、ただじぶんの正しきというものに汚点がついたのが、しゃくだった。ちようど、買ったばかりの白いシャツに、汚泥おでいの飛沫ひまつをひっかけられたように。

石太郎にすまないという気持ちや、石太郎はぎせいに立ってえらいなという心は、ぜんぜん起こらなかつた。石太郎が弁解しなかつたのは、他人の罪をきて出ようというごとき高潔こうけつな動機からでなく、かれが、齒がゆいほどのぐずだつたからにすぎない。

また石太郎は、なんどむちでこづかれたとて、いっこう骨身ほねみにこたえない。まるで日常茶飯事さはんじのようにこころえているのだから、いささかも、かれにすまないと思う必要はないわけである。

むしろ、石太郎みたいな屁の常習犯がいたために、こんななやみが残つたのだと思うと、かれがうらめしいのである。

しかし、ときが、春吉君の煩悶はんもんを解決してくれた。十日もすると、もうほとんど忘れてしまった。

だが春吉君は、それからのち、屁そどうが教室で起こつて、例のとおり石太郎がしか

られるとき、けつしていぜんのようにかんとんに、それが石太郎の屁であると信じはしなかった。だれの屁かわからない。そしてみんなが、石だ、石だといっているときに、そつとあたりのものの顔を見まわし、あいつかもしれない、こいつかもしれないと思う。

うたがいだすと、のこらずのものがうたがえてくる。いや、おそらくは、だれにもいままでに、春吉君と同じような経験があつたにそういないと考えられる。

そういうふうには、みんな狡猾こうかつそうに見える顔をながめていると、なぜか春吉君は、これらの少年の顔が、その父親たちの狡猾な顔に見えてくる。おとなたちが、せちがらい世の中で、表面はすずしい顔をしながら、きたないことを平気でして生きていくのは、この少年たちが、ぬれぎぬをものいわぬ石太郎にきせて知らん顔しているのと、なにか、にかよっている。しぶんもそのひとりだと反省して、自己嫌悪じこけんおの情がわく。だが、それは強くない、心のどこかで、こういう種類のことが、人の生きていくためには、肯定こうていされるのだと、春吉君には思えるのであつた。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

初出：「哈爾濱日日新聞」

1940（昭和15）年3月23日～3月30日

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2001年9月4日公開

2013年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

屁

新美南吉

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>